

# 令和4年度環境経済委員会行政視察報告書

環境経済委員長 石橋 毅

【視察日程】 令和4年8月12日（金）


【出席者】 委員長 石橋 毅  
副委員長 秋山 陽  
委員 桜井 秀夫、岩崎 明子、石川 弘、蛭田 浩文、  
川村 博章、白鳥 誠、福永 洋  
随行員 西森 照泰、丸山 貴裕、泉 潤子

## 【視察地及び調査事項】

1 農政センター

(1) 農政センターの機能強化に向けたリニューアルについて

## 【視察報告】

<b>調査目的</b>	<b>1 農政センター</b> 農政センターにおいて、今後の本市農業の成長産業化に資することを目的に、機能強化に向けてリニューアルプランを策定したため、当該プランについての説明を聴取するとともに、施設を視察し、本市農業施策の取組状況や課題を調査し、今後の施策展開に生かす。
<b>視察概要</b>	<b>1 調査項目</b> (1) 農政センターの機能強化に向けたリニューアルについて <b>2 説明者</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 千葉市経済農政局農政部長</li><li>・ 農政センター所長 ほか</li></ul> <b>3 現地視察の様子</b> ① 農政部からの農政センター施設及びリニューアルプランの概要についての説明を聴取  ② 露地栽培を行っている千葉県産落花生新品種（おおまさリネオ）の説明を聴取 

③ センター内直売所の様子



④ 無農薬で栽培しているブルーベリーの生育状況の調査



⑤ ガラス温室ハウスを用いた栽培状況についての説明を聴取



⑥ センターで所有する農機具の説明を聴取



4 主な質疑・意見（□：質疑・意見 ■：答弁）

□ 千葉市の特産として、イチゴは分かるが、他のものについて示されたい。

■ 千葉市における個々の農園の規模はあまり大きくないため、イチゴ、トマト、キュウリなどの施設園芸農業を中心に産物として活性化していくものと考えている。

また、一部の法人ではライチやマンゴーを栽培していて、こういった果樹は本来、九州地方が主な産地ではあるが、近年、千葉市内も気温が高いことから、このような果樹を栽培するという選択肢もある。イチゴに傾倒するのではなく、色々な可能性を検討しながら、チャレンジしやすい作物から取り組み、新たな有望品目を探すことを考えている。

□ 現在は物流が進展しており、例えば、早朝に高知県で収穫したものがその日の朝のうちに東京で販売されている。昔はそのようなことがなく、遠方の産地と競合することはなかったが、時代が変わり、本市は首都圏に近いからといってその優



位性がなくなってきている。そういった懸念に対する見解は。

■ 発言のとおり、九州産や四国産のものが店頭によく並んでいる。

一方、働き方改革の影響により、物流の世界が厳しくなっている。労働基準法関係の改正等により、トラック運転手は今後長時間運転ができなくなるということが目前まで迫っており、2024年には九州や四国

といったところからのトラック輸送が困難になると言われている。

これにより、遠方からの商品が流入しづらくなり、市内産品を販売するチャンスが到来することになる。そういったことを踏まえて、例えば、高知県や遠方にある品種にチャレンジしていくことに対してサポートしていければと考えている。

一方で、今、遠方から入ってきているものが市内に入っなくなり、なくなることが想定されるので、その点を考慮した上で農政部として取り組んでいきたい。

- 千葉県ブランドの落花生で、人気のあるおおまさらネオに関して、栽培から収穫までは長期期間を有すると思われるが、農家や一般市民に対してはどのように周知しているのか。



- 現在はコロナの影響もあり、人が集まる事業の実施が困難であるが、以前は、農政センターにおける栽培の講習会の開催や、農業技師が農家へ出向いて栽培方法を教えていた。

- 農政センターにおける事業や施設そのものの周知についてどのように取り組んでいるのか。

- 最近では、栽培の時期が始まったこともあり、協議会を新たに立ち上げて、イチゴ農家20数名に参加いただき、検討会を始めている。まずはそういったところから施設を知っていただく機会を作っていくとともに、見せられる技術が蓄積されればセンターにおいて見学会などを実施し、農家へ来ていただく機会を設けたいと考えている。

加えて、営農指導に関しては、これまで職員が不足していたこともあり、現場へ我々が出向くことが少なかったため、これを反省点として認識している。まだまだ足りないが、最近では農家の話を聞くことを重要視しており、この取組を充実していきたい。

- 農家が減少しているが、その要因の一つとして、収益性が低いこと、後継者不足になることが考えられる。

例えば、イチゴであっても温室設置への投資に対し、どの程度の収益で利益が生じて、経営が成り立つなど、次の世代も引き続き農業を続けられるようにしていくためにはどの程度の収益が必要なのか。

- HPに参考として経営モデルを掲載している。栽培品目はイチゴと



トマトとしており、売上が3,000万円と1億円のケースを掲載している。例えば、イチゴの場合、高設栽培が一般的であるが、売上が3,000万円で、経費がおおむね2,000万円程度かかるため、所得としては1,000万円となる。なお、これは法人ではなく、家族経営をモデルとしている。

今、数字だけでいうと眉唾物のように聞こえてしまうと思うが、今回参考で出させていただいているのは千葉市内ではないが、国内のあるイチゴ農家さんの実際の経営をベースにしたモデルを記載している。

ただ、イニシャルコストに関して、ハウスを建てる費用は、現在、建築資材が高騰していることもあるため、これより記載モデルより経費かかってしまう懸念があるが、この点に対しては、最初の段階で融資を受けたり、補助金を使ったりというところがあるので、市としても、イニシャルコストのところをしっかりとフォローできるような支援策を行っている。

また、国から新規就農者などへの施策として、以前は年間150万円の生活費のみの支援だったものが、施設のイニシャルコストについて、自身で負担する250万円を含めて合計1,000万円の経費に対し、その4分の3である750万円をサポートする支援事業が出てきており、イニシャルコストに対する支援についてはサポートできると考えている。

□ 有機農業補助が良かったと思うが、有機というまでには何年かかかると思う。次年度以降の取組の検討状況は。

■ 今、有機農業者が市内に19名いることが分かっているので、半分の10名ほどにヒアリングを実施した。その中で千葉市の有機農業をどのようにしていくかを検討しなければならないが、やはり稼げる有機農業というものが主な方向性になるのではないかと考えている。



一つは、花見川区でビニールハウスを使用し、葉ものの小松菜を作って、年間1,500万円の売上有る農家がいる。二つ目は、緑区でおおまさりのゆで落花生をECサイトを使って関西の方に販売して、おおむね年間800万円の売上有る農家がいる。他の方にもヒアリングはし

ていかなければいけないし、千葉市の主要品目を考えなければいけないが、今、モデル的なものはビニールハウスの葉ものとゆで落花生が有望な品目になってきているので、そういったものを含めて有機圃場にして栽培をしていくようになるのではないかと考えている。

□ ソーラーシェアリング、太陽光発電があまりうまくいってないところがあるという話を聞いたが、どのように今後展開していくのか。

■ ソーラーシェアリングについては、現場では意見が二分されていて、栽培をきちんとやれているところもあれば、なかなか難しいというところもある。大木戸町でソーラーシェアリングをやられており、1ヘクタール程度の規模で、下の農産物もしっかりやっていて、事業者との連携もしているところがある。

また、みどりの食料システム戦略という国の事業に対して、事業者が自ら事業の認定を取られて実施しているため、そこに市としても参画させていただき、勉強した上で栽培指導等に結び付けたいと考えている。

□ 農政センターの雰囲気以前と大分雰囲気が変わったと感じた。それは、コミュニケーションの取り方が変わったのだと思う。その一つ



の現れ方として、リニューアルプラン策定に当たってワークショップを重要視した点と思われる。リニューアルプランは固まったが、時期を見つけてこういった取組を継続したらいいのではないかという印象を持っているが、これに対するの見解は。

■ 我々が重要視したのが、ワークショップというか、まず、市の農政部門内でしっかり議論するという点である。このプランを策定するに当たり週2回ぐらい事業者と打合せをして、1個ずつ作り上げた。農家とのコミュニケーションでは、例えば研修会でも、ただの勉強会ではあまり面白くなく、また、事業に関するアイデアは農家からは出づらいということもあったので、職員がファシリテーションをして、職員のアイデアがある中で、会議についてはワークショップ形式で実施した。

板書を使って会議をするという方が増えているので、引き続きファ

シリテーションの技術とかワークショップというのを継承していけたらと考えている。

- これまでは米どころとい  
えば新潟であったが今では  
北海道であるなど、気候変動  
により産地の環境が変わっ  
てきていることに対する対  
応というのも今後の農政セ  
ンターの役割の中であるの



ではないかと考える。大雨などにより農作物が被害を受けることもあり、そういったことに対する対策は。

- 環境への対応は課題としてあり、今後の地球温暖化を捉えて、二酸化炭素削減率を少しでも減らしていく方針である。施設園芸をベースに考えていくが、施設園芸は環境負荷が大きい。農業は基本的には環境に負荷をかける産業であるが、その中でも特に負荷の大きい栽培方法になる。それをできるだけ環境に負荷をかけないようにしていく方法がどういうものかというのをまさに検証するために今回実証するものである。

また、有機圃場であれば、生物多様性等への対応というところというと、有機農業はひとつのツールとして国も推奨しているので、千葉市内でメインでやっているところは少ないが、収益を上げることが前提となるけれども、そういった形でセンターとしてはサポートしていきたいと考えている。

災害という面に対しては、一昨年の台風で千葉市も大きな被害を受けているが、セーフティーネットは国の施策を使いながら着実にやっている。

また、令和元年の台風以降、現場に対する台風対策として、アフターケアとして現場への見回りも行っており、足元のところもしっかりと取り組んでいきたいと考えている。

- 今、温暖化により平均気温が上がっていて、千葉も熱帯のような気温になっているのであれば、その気候に合わせた作物を栽培したほうが地元の農家の収入が上がると考えられる。温暖化を抑えることも大切だが、逆に対応していった気候変動に対応した栽培により農家が収入を上げていくという、転換の部分に対する動きがあったら教えていただきたい。



■ 品目としてのターゲットリングはまだできてはいないが、ライチとかマンゴーをやり始めている農家は千葉市内でもいる。我々として、今のところ熱帯系の果樹に関する栽培技術は有していないため、研究してセンター内のハウスで実証していくことで技術を普及するということは十分あり得る。

例えば、青森県の弘前市は日本一のりんご産地だが、逆に言うと、リンゴにこだわりすぎて、他に切り替えがきかないという難しさがあるようである。産地で主要品目があるからそれでいいという状況にずっとあぐらをかいてしまったので、高齢化もあり、木も古くなっているという中で、どう転換していこうかという悩ましい課題があると伺っている。

その点において、千葉市ではイチゴ農家が最近少しずつ増えているが、あまり特定品目に寄りすぎた栽培体系でないことが、ある意味弱みでもあるが強みでもある。そういった中で、熱帯系の果樹などをやられている農業者がおり、いいところをセンターとして研究していき、それを普及して高収益につなげていく取組が行いやすい土地柄であることから、そこを普及していければと考えている。

□ 災害対策においては、2つの考え方があると思っている。一つは、千葉では長狭米など早く収穫をするというものがあつたと思うが、台風季節が来る前に収穫し、被害を最小限に抑えること。

二つ目は、洪水が来そうになったら土のうを積む、木が倒れそうだったらビニールハウスなどが飛ばないように対策を取るというものである。

いずれも、本市にはウェザーニュースがあるので、協力いただき、事前に台風の状況等を情報提供することで、天候に対する対策を考えていくことについての見解はどうか。

■ 一つ目の長狭米に関する件については、米に関しては農協が深く関わるとい話があり、職人という話でいうと、どちらかという、千葉市の農家は、コシヒカリを作っているという状況もあるので、品種を変えるということはいい案だと思うが、なかなか千葉市の農家の中では難しいと考えている。

二つ目は、県から対策について通知が出ており、台風が来るまでの対策や、台風通過後の対応というものがあるので、それを農家の方に周知して、事前収穫や事後の対策というものを周知するとともに、要請があれば我々が対応することも行っている。

また、ウェザーニュースを活用してはとのことだが、今、実際に農

政センターの中に、スマート農業の実証フィールドということで、ある企業が、気象状況を見える化できるシステムを導入している。農家にはそのIDを教えていて、農政センターの気象状況が分かるということで、そのデータを活用していただいております、農家の方には喜ばれている状況である。

□ 農政センターが設立されてから44年がたっている。この半世紀近くの間、千葉市農業に対して果たしてきた役割及び成果等はどうか。また、千葉市の農家がセンターに求めていたニーズは現在どのように変化しているのか。

■ 農政センターは昭和53年に設置され、その間、野菜農家の支援、柿農家の支援をしてきた。温室のガラスハウスがあるが、もともとは柿農家のために様々な種苗供給等のため使用していたものが、柿農家が段々少なくなってきたため、使いづらくなり野菜用の栽培に適しないものになっている。そういった中で、農政センターで蘭を研究し、新品種を納入して農家への供給を行ってきたので、そういった面では一定の役割を果たしてきたと考えている。

また、時期によって栽培品目等が変わってきているので、それに対応して試験栽培や種苗供給などを充実させていながら農家のためになるような施設に生まれ変わっていくようにと考えている。

実は農政センターを廃止するという議論も以前はあったが、一方で市単位で農政センターのように技術を実証できる拠点というのは、県内でも船橋と市原くらいで、全国でも市立は20か所程度しかない。当然、県単位では設置されてはいるが、市単位で現場に近いところに設置されているというのは希少な存在である。

私は国から千葉市へ出向している立場であるが、特に今回はスマート農業のような技術は、国の立場で技術ができたから使っと現場へ持って行っても、現場としては使えないと言われてしまうことがある。そういったときに、農政センターのように市の施設で見せたり教えたりすることができる、農家も大分食いつきやすくなるので、その点においてすごく貴重な拠点施設だと思っている。そういったところを大事にしながら、今の時世にあった栽培品目や新しい技術を伝えていくというような施設としてこれからはリニューアルしていくという方向性なのかなと思っている。

	<p>□ 有害鳥獣対策等について、現状の対策はどうか。</p> <p>■ 有害鳥獣対策については、猪はこれまでになかった。市原や近隣からくるので、その対策を強化している。あとはアライグマ、ハクビシンといったものについてもやっぺいかないと、農家の意欲が低下してしまうため、要望に応じてセンターが取り組んでいかなければいけないと考えている。また、環境保全型農業ということで、土壌診断を開設以来行っているが、それは家族農家支援のための重要なツールであるため、引き続きその機能は維持していきたいと考えている。</p> <p>□ 農政センターに求められてきた役割と今後求められる役割とはどういったものか。</p> <p>■ 以前の農家は、それぞれが市場出荷で同じような品目を作って出荷されていたので、我々としては、組合、団体をまとめるという役割が多かった。現在、いろいろな販売のスタイルもあれば、品目も多様化している。我々としては以前と異なり、個々の生産者のコーディネートするような役割が求められてきていると実感している。</p>
<p>委員の所感</p>	<p>□ これからのスマート農業において、新しい温室が農家や新規事業者にも新しい改革となり、農業経営の取組に力を入れている農政センターの役割が非常に大事だと感じた。</p> <p>□ 現場となる農家を第一に考え、現場が頼れる、使いやすいセンターとして活用してもらえようコミュニケーションをより一層図り、民間と連携して出た新しいICT農業を見出してもらいたい。</p> <p>□ 小学生が将来目指したいと思えるような授業や体験ができるよう、農育についても引き続き実施を求めたい。</p> <p>□ 市内農業の育成に資する実証実験を行うには、一定の設備整備を伴うが、その必要性が現場視察によって実感できた。(スマート農業、優良種苗の供給等)</p>



	<p>□ ワークショップが農業と結びつくイメージはこれまであまりなかったが、重要な取組であり、組織の目標設定だけでなく、人材育成や営農指導においても有益であり、リニューアルの方針が定まった今後も、定期的な実施が有効だと感じた。</p> <p>□ 気候変動による災害が頻発する時代状況にあって、災害（猛暑、豪雨等）や気候変動（気温変化）を見据えた（収入保険に限らない）農家支援についても期待したい。</p> <p>□ 築40数年という年月から時代のニーズに応えるため、新しい分野に替えていく必要があり、温室栽培の改革にも取り組む姿が伺えた。</p> <p>□ 農業技術の革新やグローバル化やSDGs等の環境に配慮した、次世代へつなげていく農政センターのリニューアルプランの説明を受け、新しい時代の農政センターを感じることができた。ぜひとも、農業生産者に寄り添い、生産者が求めている野菜や果樹等への栽培技術を確立し、営農指導ができるようにコーディネーターとしての役割を果たしていただきたい。</p> <p>□ 農政の分野でもSDGsに向けた取組として新たなビニールハウスを建設したとのことで、オール電化や重油の使用量を下げる取組を進めるとのことだが、コスト削減につながることであり、大いに期待が持てると感じた。</p> <p>□ 後継者の育成に力をいれていただきたい。</p>
--	--